

優秀賞（国土交通事務次官賞）

△作文（中学生）の部▽

『土砂災害を経験して』

佐賀県吉野ヶ里町立東脊振中学校 一年 寺崎 藍

平成二十二年七月十四日、私の家は土砂災害にありました。

その日の朝、いつもどおりに起きると、外は真っ暗でした。何となく嫌な感じでしたが、学校へはバスで通学しているから大丈夫だろうと思い、家を出ました。しかし、家を出たとたん土砂降りの雨で雷も激しかったので、バス停まで母に送ってもらい、学校へ向かいました。この天気にも多少の不安はありましたが、学校に着くとその不安も消え、授業や休み時間もいつもと同じように過ごしていました。

二時間目が終わり、急に先生に呼ばれたので「なんだろう？」と思って先生のところへ行きました。そこで先生から信じられない話を聞かされました。それは、私の家が土石流災害にあったという話でした。

先生の話聞いて私は家のことで頭がいっぱいになりました。「お母さんやおばあちゃんは大丈夫かな？」「犬は大丈夫かな？」「家はどうなっているのかな？」と、いろんなことが次から次へと思いつくや、頭から離れませんでした。

先生からうちへは帰れないこと、町の施設に帰ることを聞かされて走って帰りました。そこに着くと弟が先に戻っていたので、すぐに「お母さんたちは？」と聞きました。弟が教えてくれた方を見ると母や祖母は、同じように避難していた近所の人たちと話していました。二人の顔を見た瞬間、自分の中にあった不安がすうっと消えていきました。

翌日、私は祖母の家から登校しました。学校へ行くと、クラスのみんなが百羽ヅルを折ってプレゼントしてくれました。友達が、

「百羽のヅルの中には、藍へのメッセージを一人一人書いたよ。これをお守りだと思って頑張つてね。」と言ってくれました。私のためにみんなが思いを込めて作ってくれたのだと思うと、うれしくてたまりませんでした。家に帰りこのことを話すと、祖母がその百羽ヅルを部屋に飾ってくれました。私はこの日から、この百羽ヅルに「早く家に帰れますように」と願い続けました。

次の日、学校から帰ると、母が家を見に行こうと言いました。私は今まで暮らしてきた自分の家がどうなっているのか、不安でいっぱいでした。それは弟も同じ気持ちだったらしく、家に向かう車の中で、いつもよくしゃべる弟が珍しく静かでした。

家の前の道路で車を降り、急いで家まで走りました。私は、目の前の光景に驚き、声も出ませんでした。車庫には木がささり、家の前にあった車やバイクは、土砂で押し流され落ちる寸前でした。屋根は土砂でけずられ、以前の姿とはまるで違っていました。

私の横で、母は声をあげて泣いていました。弟も私と同じように、その場で口をあげてかたまっていました。しばらくして、私は飼っていた犬がいなくなっていることに気付きました。急いで父に確認し、車庫の下にいるかもしれないと思い、必死で探しました。助きたい気持ちでいっぱいでしたが、その日はみつけることができませんでした。

学校で友達にこの日のことを話しました。すると、「絶対助かるよ。」「生きているから大丈夫だよ。」と声をかけてくれました。友達のような言葉に励まされて家に帰ると、母がうれしそうに話しかけてきました。犬が見つかった。父が車庫の扉をあけたときに見つかったと言っていました。車庫に車が一台流されずに残っており、そのおかげで奇跡的に助かったようです。

あれから二年がたちました。私たち家族は、一年半の間、避難勧告民として団地で暮らしましたが、ようやく自分の家に帰ることができました。住みなれない場所での生活は、苦勞もあり、不便なこともたくさんありました。しかし、今こうして自分の家に戻ることができたのも、国や県など多くの機関が支援し、協力してくださったおかげです。そして、なによりも感謝しているのは、励まし支えてくれたクラスの友達です。

私を、そして家族を支えて下さったすべての方々に感謝しています。
ありがとう